

平成二十八年 度

国

語

(C 日程)

(解答はすべて解答用紙に記入しなさい)

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

フィリピン滞在^{たいざい}が半年を過ぎたところから、どうしても我慢^{がまん}できなくなつたことが一つあります。単独外出を許されない不自由さです。日本では、視覚障害者が単独で外出するのは珍^{めづら}しくありません。私の場合、大学二年の冬からは一人暮らししていたのもあつて、ほとんどの場合一人どこへでも行っていました。私がいつどこへ行こうが誰^{だれ}が何を言うでもなく、完全に自由でした。しかしここマニラでは、安全上の理由で、視覚障害者が、とくに外国人の女子である私が、一人で外を出歩くのは、物を取られたり襲^{おそ}われたりする可能性が非常に高いです。だから私はこれまで一人で出歩くことを許されず、いつもガイドヘルパーの人といっしよでした。

何というか、本当なら一人で歩ける道なのに、いつもいつも人にガイドされて歩くのは、かなりプライドが傷つきます。私が昨日どこへ行つて誰と会い、何を話したか、帰りに何を買つたか、今銀行に幾^{いく}らあるかなどなど、ガイドの人に全^{すべ}て知られているわけですから、プライバシーも何もあつたもんじゃありません。それに、ガイドヘルパーなんかといっしよに歩いていることを、日本の友達に知られたくない、見られたくないと強く思うのです。

最初の半年こそ、フィリピンは日本とは状^{じやう}況^{かう}が違^{ちが}うんだから仕方がないんだと自分に言い聞かせてきましたが、半年経^たつた一〇月初めごろ、もう自由になりたくてなりたくて、一人で外に出たくてたまらなくなりました。何で私は、一人で家の周りさえ歩くことができないのか。もし誰かにガイドされて外に出なきゃいけないのなら、もう外出なんてしたくない、そう思いました。また、半年単独で外出していない自分は、日本に帰つたらもう一人で電車など怖^{こわ}くて乗れないんじゃないか、白杖^{はくじやう}の使い方なんて忘れてるんじゃないかと。籠^{かご}の中で飼^かわれている鳥は、次第^{しだい}に飛べなくなつていきます。飛べない鳥なんて、もう鳥じゃないですよ。自分が持っていたはずの能力が、日に日に失われていくのを感じるののはものすごく怖いのです。

一人で外へ出たい、家の周りだけでもいいから、自由になりたい……。それを周囲に何度も話しました。誰と戦っているのか、食事もとらずに部屋にこもったり、ホストファミリーに泣いて頼^{たの}んだり、挙げ句の果てにそれまで四カ月つきつきりで面^{めん}倒^{だう}を見てくれているもつとも優秀^{ゆうしゆう}なガイドに愛想^{あいそう}を尽^つかされてしまひ……。4

「君に単独で外出する能力があるかないかの問題じゃない。それができることは分かつてゐる。」

A

、日本とフィリピンで

は状況が違うんだよ。その現実、受け入れるしかない」とみんなに言われました。社会への抵抗もこれだけは叶わず、単独外出は諦めることを強いられました。

でも、その時気付いたんです、どうして私はガイドと歩くのがこんなに嫌で、「誰と行くの?」「誰が付き添うの?」などと聞かれる言葉に必要以上にこんなにイライラするのか。それは私の中で、「一人でどこへでも行ける視覚障害者のほうが上」という基準があるからです。

私は、本当なら単独でどこだって行ける力がある。でもこの国の治安のせいで、仕方がないからガイドと歩いてるだけ。他の視覚障害者たちは、本当に単独で歩く力がないからガイドと歩いてる。これは大きな違いであって、いっしょにされたくない。それなのに、私がガイドと歩いてたら、周囲に、彼らと同じレベルだと思われる……、それが何よりいやでした。

でも、諦めざるを得なかった時、気付いたんです。「その人がどれだけ自立しているか」を基準にしているのは、私だけ……、あるいは日本の視覚障害者だけじゃないかと。フィリピン人にとっては、べつにそれは、視覚障害者のレベルを決める基準ではまったくないんですね。彼らにとっては、自立していることや、一人で何でもできることより、いかに人前で自分の意見をちゃんと伝えるか、いかに顔が広いか（つまり、いかにガイドと共にあちこちに顔を出してるか）……、そういうことのほうが重要なんです。

フィリピン人の基準で見られたら、こっちに来て一年も経ってない私は当然知り合いが少ないですし、現地の言葉であるタガログ語ができないので、発言できる場も少なくなります。そう……、こっちの基準で見ると、私は下のほうにランクされるんです（私がこうして、上下関係を言っている……ここからおかしいんじゃないか……と言うつつこみは、今はちよつと忘れて下さい）。

以上のことに気付いた時、「基準」が分からなくなりました。けっきょく、フィリピンで生きていきたければ、こっちの基準で尊敬される視覚障害者になっていかないと意味がないんですね。無理して外を歩いても、誰もそれをすごいとは思わないのです。もっと言えば、人はみんな、自分が上に立てるように基準を決めるんじゃないかと。

B 私は、いかに単独で外出できるのかとか、教育を受けているかとかで人を判断したかった。そうすれば、自分が有利だからですね。

途上国と先進国だなんて、誰が決めたんでしょう? 世の中の発展度合いを、経済や技術で判断するって、誰が決めたんでしょう? 間違いない、先進国の人たちだと思います。それを基準にすれば、自分たちが有利になるから。

C 世の中の基

準が、バナナの生産量だったら……。とたんにフィリピンはトップ五に入り、日本は途上国です。もしフィリピンが世界をランク付けする基準を作るとしたら、「島の数が多い国ほど先進国」という基準を設けるかもしれません。

ばかじゃないの、そんなの世の中成り立たない……。と私たちが感じるのは、自分たちが教え込まれてきた「基準」が全てだと信じ切っているからであって、「基準」なんて本当はないかもしれない……。私は、フィリピンに滞在して半年が経った一〇月の終わりごろ、ようやくこれに気付きました。「世の中に基準なんてないんじゃないか、自分の基準は相手には当てはまらない」と思うと、何だか相手の見方が変わる気がします。

(出典 石田由香理・西村幹子「へできること」の見つけ方―全盲女子大生が手に入れた大切なもの」岩波ジュニア新書による)

問一

A～Cに入る言葉として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア なお イ だから ウ ところで エ でも オ たとえ カ もし

問二

——線1「単独外出を許されない」とありますが、なぜですか。四十五字以内で説明しなさい。(句読点等記号も一字に数える。以下の問いも同じ。)

問三 ― 線2「ガイドヘルパーなんかと強く思う」とありますが、なぜですか。最も適当なものを次の中から選び、記号

で答えなさい。

ア 一人どこへでも行ける視覚障害者のほうが上だという基準を持っているため、単独で出歩く力がない視覚障害者と同じレベルだと思われることがいやだったから。

イ 日本ではガイドヘルパーという仕事があり知られていないため、ガイドの人といっしょに歩くことで怠^{なま}けていると思われるしまうことが我慢できなかったから。

ウ どこへ行くにもガイドヘルパーがいっしょにしていると、自分の生活をすべて知られることになり、プライバシーが守られていないことをずっと不満に思っていたから。

エ 国の治安のせいで仕方がないからいっしょに歩いているだけなのに、自分がガイドヘルパーと同じレベルだと周囲の人々に思われてしまうことがはずかしかったから。

オ いつもガイドヘルパーにつきそわれていると、自分が視覚障害をもっているということを周囲の人々に気づかれてしまうため、プライドが傷つくことになるから。

問四

——線3「籠の中で飼われている鳥は、次第に飛べなくなっていくます」とありますが、これはどのような内容を説明するための表現ですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 親切(おんなじ)なホストファミリーにあまえて楽な生活を送っていると、その生活になれてしまい、いつまでたっても一人で外出する力が身につかないということ。

イ いつもガイドヘルパーに付き添われて一人で出歩く機会がなくなると、今まであった能力が失われ、単独で外出することができなくなること。

ウ ガイドヘルパーに付き添われることをいやがって文句ばかりを言っていると、愛想を尽かされてしまい、外出することができなくなること。

エ ガイドヘルパーが外出を助けてくれることの便利さを知ってしまうと、日本に帰った後も一人で外出しようという気持ちがうすれてしまうということ。

オ いつも人にガイドされて歩いていると、一人で外出する能力がないのだと周囲の人に誤解されて、だんだんと自信が持たなくなってしまうということ。

問五

——線4「それ」が指す内容を本文中から十字以内で抜き出しなさい。

問六

——線5「もしフィリピンが基準を設けるかもしれません」について、

(1) この具体例はどのようなことを説明しようとしているのですか。三十字以内で説明しなさい。

(2) (1)を踏まえて、筆者はどのようなことに気付きましたか。二十五字以内で説明しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

県予選第一試合は一学期のうちに行われた。旺華高校では野球部と応援部と吹奏楽部が公欠扱いになり、朝からバスで球場入りした。

スタンド演奏では応援団長が試合の展開に応じて応援の方向を決め、吹奏楽部はその指示を受けて演奏する。応援部員はもちろん、ベンチ入りできない野球部員もスタンドに居並び、声や動きを合わせて応援に加わる。彼らが手にしたメガホンは拡声器と打楽器を兼ねていた。

学校でも合同練習は行っていたが、三つの部が勢揃いして合わせるのは初めてだった。野球部OBや父兄や一般の観客らしき人もいて、一塁側の応援席には試合前から高揚した雰囲気^{ふんいき}が漂^{ただよ}っている。風香はチューニングしているうちから緊張してきた。

吹奏楽部の指揮をとるのは山岡さんという二年男子のトランペット奏者だった。まずは試合前のエール交換^{こうかん}ということで、先攻^{せんこう}の葦井商業の校歌を旺華の吹奏楽部が演奏するのがしきたりで、山岡先輩は厳しい顔つきで指揮棒を振り上げた。

「それじゃ、気合入れていこう。音は相手の応援席に飛ばすつもりで！」

「はい！」

一同が A を揃えて返事して、指揮棒が動き出す。吹奏楽部の演奏に合わせて野球部はメガホンを叩き、応援部は大声でエールを上げてくれた。普段はやらない曲に普段とは違うリズム音^{おと}が加わって、風香も部内の合奏より大きな音を出せた気がした。続いては葦井商業が旺華の校歌を演奏する番だったが、風香はそこで目を見開いた。――三塁側から響^{ひび}いてくる音の方が、格段に大きかったのだ。旺華だっていつもより大きめの音で演奏したのに、相手は最初から全力で大音量を出してきたらしい。球場周辺の騒音被害^{そうおんひがい}を考慮^{こうりょ}して和太鼓や大太鼓は使用禁止のため、ずらりと並べた金管楽器の音圧で迫^{せま}ってくる作戦のようだった。

「かましてきたなー」

指揮の山岡先輩も悔^{くや}しげだった。どうやら試合前から勝負は始まっていたようだ。野球部を応援するだけでなく、吹奏楽部もこういう形で戦うものらしい。

まずは三塁側が勢い勝ちした格好だった。応援席が演奏するのは攻撃の時というのが基本なので、葦井商業は勢いにのっただまま一回表の攻撃に入っている。先頭バッターが二塁打で出塁すると、途端^{とたん}に派手なマーチが鳴り響き、応援席はさらに盛り上がる。

そうなる風香も早く演奏したくなるが、まだそのタイミングではない。守備側の旺華の吹奏楽部はじつと出番を待つしかなかった。²

一回表の攻撃は長引いたが、最後はダブルプレーでスリーアウトとなった。ランナーを出しながらもなんとか〇点で乗り切った旺華ナインを、応援席は派手なファンファーレでねぎらう。

そして山岡さんは、指揮棒を止めずに声を上げた。

「それじゃ、まずはうちの校歌。いきなりフォルテで入るぞー！」

「はい！」

攻守交替の間、ようやく自分たちの校歌を演奏できた。吹奏楽部は思い切り爆音を出し、スタンドの野球部員や応援部員も精一杯の声を張り上げる。その勢いで校歌を吹き終え、一番バッターの応援曲へ移る。——一回裏の攻撃は三者凡退で終わったものの、風香は密かに満足していた。

スタンド演奏がどういふものか、やっと実感できたのだ。いつもの演奏は楽譜に沿って進むけれど、今は野球の試合に合わせて進んでいる。音楽が試合に寄り添っていること、その中に自分があることが心地いい。野球には疎くて運動も苦手な風香でも、スタンド演奏を通して試合に加わっている気分になった。

こうなったら自分たちの演奏で勝利を招き寄せてみたい。しかし試合は葦井商業リードで進んでいった。葦井が先取点をとった後、旺華も追撃はするものの、一点差が埋まらないのだ。試合の後半にさしかかる頃には応援席にも焦りや苛立ちが漂っていた。³

それを覆ったのが山岡先輩だった。——ずっと指揮者に徹していた彼が、七回表が終わるとトランペットを手にした。攻守交替の間の演奏は、彼のソロから入ったのだ。

一回裏の校歌は普通の演奏だったが、勝負どころの七回で演奏する校歌は大胆にアレンジされていた。イントロは『必殺仕事人』のテーマから入り、その軽快なテンポのままポップス調の明るい校歌となるのだ。トランペットソロから入る『必殺仕事人』では奏者の技量が問われるが、山岡先輩は聞く者に息を吞ませるほどのハイトーンを響かせた。

響きわたる高音に、一瞬球場全体が静まり返った。そこに他の楽器や手拍子^{てびょうし}が加わり、これまで以上の熱気が生まれる。停滞^{ていたい}気味だった空気を吹き払うような演奏となり、応援もさらに盛り上がった。トランペットのソロが一塁側の空気を一変させたのだ。

その気合いが選手たちにも乗り移ったようだった。旺華の攻撃は先頭打者の二塁打に始まって打者一巡の猛攻となり、逆転を果たした上に三点差もつけて引き離すことができた。

当然、応援席は沸き返る。長い攻撃がやんだ後には、愛留美が嬉しそうに話しかけてきた。

「山岡先輩、かつこよかったねー！」

同じトランプットの愛留美にとって、山岡先輩は憧れの存在である。その頬は日焼けの上に紅潮し、瞳は夏の日差しを跳ね返して輝いていた。

風香はにっこり笑ってうなずいた。隣の西山一恵が、からかうような声を上げる。

「愛留美、目がハート型になってるよ」

愛留美は否定もせずに笑っている。彼女が山岡先輩に向ける熱い眼差しは、一年の女子の間では周知のことだった。

風香はふっと有人の演奏を思い出した。——中学時代、自分もソロをとる有人を見つめていたはずだ。演奏中は指揮者や楽譜に集中しなくちゃいけなかったはずなのに、演奏している有人の姿は

B

に焼きついている。

今の風香に、そうやって見つめる相手はいない。だけどスタンド演奏が気持ちいいのは、広い野球場を見渡しながら演奏できるからだ。サックスを通して世界が広がっていくような気分を味わえ、応援しているチームが優勢となればなおさらだ。

旺華高校野球部はその後もリードを守りきり、一回戦を勝ち抜くことができた。吹奏楽部は三度目となる校歌の演奏で勝利を祝い、勝った野球部はスタンド前に整列して頭を下げる。応援席は惜しみない拍手を贈り、スタンドとグラウンドで喜びを共有することができた。

その一体感は、これまで風香が味わったことのないものだった。勝利だけじゃなく、演奏の一体感からさらに一歩踏み出せたことが嬉しかった。

問一

A・Bに入る言葉として、最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 鼻

イ 耳

ウ 目

エ 汗

オ 声

カ 涙

(出典 竹内真『ぱらっぱーガ』双葉社による)

問二 — 線1「風香はそこで目を見開いた」とありますが、なぜですか。四十字以内で説明しなさい。（句読点等記号も一字に数える。以下の問いも同じ。）

問三 — 線2「守備側の旺華の吹奏楽部はじつと出番を待つしかなかった」とありますが、なぜですか。「」だから。」に続くように本文中から二十一字で抜き出しなさい。

問四 — 線3「それを覆した」とありますが、どういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア トランペットを演奏することで、停滞気味だった一塁側の空気を一変させたということ。

イ 球場全体をひきつける見事なハイトーンで、相手の応援席をだまらせたということ。

ウ 一回裏には普通に演奏したのに、今回はイントロ部分を大胆にアレンジしたということ。

エ 軽快なテンポの明るいイントロを演奏して、選手たちに気合いを入れたということ。

オ 指揮者に徹していたが、トランペットを吹くことでチームを逆転へと導いたということ。

問五 — 線4「その頬は日焼けの上に紅潮し」とありますが、頬が紅潮しているのはどういう気持ちを表していますか。説明しなさい。

問六 — 線5「演奏の一体感からさらに一歩踏み出せた」とありますが、どういうことですか。七十字以内で説明しなさい。

三 次の各問いに答えなさい。

問一 次の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

① テレビ番組をロクガする。

② 北のホウガクを目指す。

③ 公園をサンボする。

④ 静かにサつていった。

⑤ たくさん買いすぎてアマった。

問二 次の――線部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

① 世帯あたりの所得が伸びた。

② 電車が遅延した。

③ 大根が煮えた。

④ 頂上に残雪がある。

⑤ 淡い色が好きだ。

問三 次の――線部の意味として最も適當なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

① まめに働く

- | | |
|---|-------|
| ア | 健康に |
| イ | まじめに |
| ウ | 適当に |
| エ | 気まぐれに |
| オ | 静かに |

② つい口がすべった

- | | |
|---|---------------------|
| ア | 正しいことをはつきりと言ってしまった |
| イ | 思いついたことをそのまま言ってしまった |
| ウ | まちがったことを強く言ってしまった |
| エ | 言っではいけないことを言ってしまった |
| オ | 伝える内容をまちがえて言ってしまった |

③ いたいけな少年

- | | |
|---|----------|
| ア | 元気で明るい |
| イ | 無口だがまん強い |
| ウ | 静かで目立たない |
| エ | 気が強く前向きな |
| オ | 幼くてかわいい |

問四 次の各文には誤った文字が使われています。その文字を抜き出し、正しい漢字に直しなさい。

- ① 調子の悪い選手に変わって出場した選手が、見事にホームランを打った。
- ② 海外に留学して、大好きな植物を専門的に研究するという夢をかなえた。

